

入院を経験して考えたこと

中 三

私は、中学二年生の一月から三月まで入院しました。入院する一か月ほど前、部活動のランニングで、それまでは友達と同じペースで走っていたのに、急に息苦しさや足の重さを感じるようになって走れなくなりました。追いつこうと、毎日頑張っていました。移動教室のときに突然息が吸えなくなると倒れてしまい、入院することになったのです。そして、先天性の病気が見つかりました。

入院して数日過ごしてみると、その病院は人権をとっても大切にしているところだということに気がきました。入院期間中、私は今まであまり知らなかった人権について、たくさん知ることができたのです。

その病院には、七階に学校がありました。院内学級や院内学校というそうです。七階全部が学校になっていて、プールや体育館もあります。私は、新しい環境に慣れていない不安な気持ちがあり、

その学校は楽しみではありませんでした。しかし、院内生活のスケジュールに組み込まれているので、心を決めて行ってみると、勉強を教えてもらうことで、病気のことばかり考えずに過ごすことができると気づきました。また、授業の中で先生がサバンナに行ったときのことなど、興味深い話をたくさんしてくれたので、病気の不安や悲しみが薄れていき、とても楽しい気持ちになりました。最初は安静が必要だったのでベッドでの授業でしたが、車いすで学校に通えるようになってからは、同じ病院に入院する人たちと関わる機会が増えていきました。常に酸素チューブをつけている人、ずっと車いすで生活をしている人など様々で、私がかかったことのない病名の人ばかりでした。けれど、みんな一生懸命勉強したり、風船バレーなどで体を動かすことを楽しんでいたり、風船バレーなどどんな状況でも学ぶ環境が一人一人同じようにあることの大切さを実感しました。病気のために長期入院しなければならぬ子供たちが、その期間まったく学習できなかったとしたら、入院していない人たちとの学習の差が開いてしまったり、追いつくのが大変になってしまいます。また、退院し

て地元の中学校に戻ったときにも、急に生活が変わることによって不安を感じてしまうと思います。私は、理科の実験や音楽の授業でギターを弾いたことがとても楽しかったのですが、寝て起きるだけの入院生活では、楽しいと思うこと、やりたいと思うことが少なくなってしまうのではないかと思います。子供には学ぶ環境が必ず与えられる権利があるということは聞いたことがありましたが、その大切さが分かりませんでした。しかし、今回の入院でその権利と環境が本当に大切だということを知り、感謝の気持ちでいっぱいになりました。もう一つ学んだ権利があります。それは、自分の病気について知る権利です。私は遺伝子検査をやりましたが、病院の先生に「結果を知りたいですか？ 知りたくないですか？」と聞かれました。自分の体のことや、病気の仕組みを詳しく知ることができたら怖くなくなるかもしれないと思いい、聞くことにしました。病気が親からの遺伝だと分かったとき、親を責める気持ちをもたなくなくて、結果を聞かない人もいます。知りたくなかったら、無理に聞かなくてもいいのです。このことも大切な人権だと感じました。私は、一

生付き合わなければならぬ病気をきちんと理解できたことで、怖くなくなりました。結果を聞いたことで、両親の血が流れていることを感じ、自分の体を大切にしようと思いました。病気の説明のときにも、先生は「本人が知る権利がある」と言って、丁寧に教えてくれました。もし、先生がやろうとしている治療に不安があったら、治療法を変えることもできるそうです。私は、そのことを聞いたときに私が意見を言っていたとは思っていなかったもので、とても驚きました。子供は、大人よりも知識がなく、経験もなく、難しいことは分からないだろうと思われてしまうと感じたからです。先生が治療のたびに丁寧に説明してくれて、治療方法や退院したあとの生活のことを一緒に考えてくれたので、私は安心して病気を治していこうと思えました。私を一人の人間として大切にしてくれ、気持ちや考えを尊重してくれていることを感じて、嬉しくなりました。病院や先生を信頼して、これからも相談しながら、病気と向き合っていきたいと思いました。

私は入院を通していろいろなことを学びました。入院している人の気持ちや大変さを知っただけで

なく、今まで言葉でしか聞いたことがなかった「人権」についてもたくさん学ぶことができました。私が思っていたよりも、人権はいろいろなところがあり、たとえば、自分が意識していなくても、自分の意見、考えを尊重し、一人の人間として命を守ってくれていると感じました。この体験を忘れず、私たち一人一人が幸せに生きていくための権利「人権」を大切にし、今後の生活を送っていきたいです。